俳諧一葉集　一

へ 5 [illegible]
1258
1

芭蕉翁發句附合文章茶話俳諧遺語消
息也一代之風藻雖不可考于茲所謂親覯
於古書収藏於他庫出悉以擧焉

俳諧一葉集

前後篇六冊

東都書林

青雲堂梓

明 利 1258 1-9

俳諧一葉集序

花になくうぐひすみづにすむ蛙の聲をきけば
生としいけるものいづれか歌をよまざりけるとのや
家にきく人によくすゝめ詩も俳諧もそれにそへつれど
あまくだりしそもじ芭蕉庵桃青翁は三十路ばかり
こゝろより佛頂禅師につきて参禅しおさとりひらき
花月の的蝶は俳諧の庭をきゝ涉して七情にかなひて
病ひをたのしむさとりなく渾沌を活して作花に
古人もよゝ代々の蕉風を轉して古今集の大いなるは

歌にまでおよふ杜律山家集の語をあたへて貞
享の初年はしめて狂句に格外の深意を発し人
情を述るに益し文章我記録にそなへさ殊に
道の称とゆふなれはふ世諸生およひ四海にあふ俳
諧丈とちを殊を杉椿郎と桃青を稀す門弟
子國にもちしても風を慕ふる人我もしいふ
数をしられさりしを底を呑て胃をあらは
大元に通しまされおほくのふりに升斗筲の量蛛
に至去に生れ師友もなりしく叶ひのはれ

此れひとゝは古学流とはかりて祖翁の一世にうち
まさりしは物を叶たりして学にすゝまじくをよし
を愛しやと発句より消息述語の志けさら至りし
ゆく集めて只ひとつの業の一とはいふにあふひとて俳諧一
葉集と起しものとなしをなりされとかれは訂
古きに西すゝ非ゆり是とてもわしく村肝をきさ
みさゆれし舎を道にはづれハ三年かゝしあふ流に
いふ説にひとしの宝しも友人坎窟の涵底をとかめくさ
全おしらせてうちあまねくの流に洋まて大事は

なを黄さんよりハ志をのべ此心境に入ておもんすれハわか
このミ人の心法を捨さいふ事ハ自然をしめして水に
遊ぶ水すちなく絶て功拙を争ひ一生を名利に
あやまらすそろそろけれハ俳諧を勉て来る俳諧を
こころみさし世のちり俳諧を守るべしとこそ丞翁
の詞をとりて功者の理に示すにて

文政丁亥仲秋

四辟亭湖中

凡例

一 発句の部寛文延宝天和時代の分ハ四季ともに
帖のはしめにあつめ貞享元禄の分ハおのおのその
季類によりて載せ季の分ハ巻末に出す
一 同輯しき集を尽せる句或ハ行脚の記録ハ俳友の許
に伝へし古書に所見なきおよそ私に捨ふまたさるを
記れハ春秋として季くの末に載
一 附合の部ハ延宝より元禄まての年歴をしく
次第にて祖翁一季の流行をしらしむ

一同二句三句或ハ五句七句迄の物ハ手爾波の末ニ載

一同古集なるハ寛文中ハ宗房と有り延宝天和ニ至てハ
桃青或ハ芭蕉ともミゆ貞享よりしハ翁と有り依て
是ニ倣ふ

一文の新古何の頃ハ不猫蛇ニ越人の此等まて咎けし
所々なく申ける標掃の従翁の作なるもの称し然
れとも文集ニ漏たるもしれハ入られハみなこれを爰ニ有
捜なけれハ末帖ニ載

一文混合としけるハ辞従雑のたくひのことにわけて従
紀行なとの中ニ在て粗なる所ハ精なる所ハ文粉しき
物もまじらし記して作人の意をとゝつ
遺語の新祖翁の語ハ是ニ入一所ニ録れてしるへし
挍すうる志のひ侍し也

一同刻の書あれみしのく此書ハ長く作り自の手大
同小異を私ニ服さへも侍るあれハ重複なるから
載

俳諧一葉集发句春之部

古學庵佛兮 編
幻窓湖中
坎窩久臧 校

寛文延寳天和年中
庭訓の法未練之席よりいまの世
迄句ごとに芭蕉桃青の名あり
多年を棚へあけてや若きは
手や人手にうれていかにもまこと来
園梁の句ともなくもちひの讀ぬ
かいるんとつくりきりまうき

もて来つる是ぞ手玉こそ玉
梅ゝ春ゝ大ナル哉春と云ゝ
え鈴鹿かり
餅を置手折清少原の手枕
季吟翁進去る
和哥の詠とふや生やしの八重ざくらみ
此梅や生れ袖垣は河色し
古比の梅や難波の二年哉
梅さやまちらし松ちる京右郎
志津しみ尾もすゞめぬ春の鶴
梅　柳　さて若菜うれ女かな
杉風写丑

さゝけより二月中旬と川若子
去年ハさやさく又まさ後よ次郎月
船の妻へつひの扇れまうかよひかり
蓑まするく白魚やとらハ消ぬ夜ぞ
石川が鰻生の尾や山居子ゑ流れし
厨んして芹の飯みさんで深川まぞ
折おさこれ青泥坊座の芹や汲むを
千代の後ともやまおおき
象る色人の鶴哺啼す芹の食
北しまんや墨子芹焼をしてと雅
さうなる梅すて了し池まきれ
梅咲や向の挽木のよまめり

竹内一枝軒まで

去年自八梅花一枝のこゝろさしを
はるあけや面しろさくよ梅数
餅ならさしうゑとなすやなまめく
ふひのん菩提の梓を前はられ
志る魚の價いるてふらうみなされ
菩提揃て貨なる女操すりよ添
内裡雛人形天皇の御字とかや
名所八体の内　二月
貝よする風のまきもやわかの浦
姨広ず須ず一つくしさるきてすゝ
揺けんや亭主木枯の貌まもして

山吹の黄金葉の色のからうち鳥をなや
憂方知酒聖貧始覺錢神
花すらむ世帯の浦さつく食足し
雨降られハ
筆展の風おれて降らむ山休らう
嵐の夜まちにそ花ちらしてや織月
花そ雅の月も見しかり兒薊
しら山やお梅しゆるの気さら
篁の先手も咲きそろう梅若
紅毛も花ず来すらうる手鞠
娘桜咲やむ旅のおもひか
京さくらこや埼るさの足もつれ

吹風の尾細くなるや犬さくら
艶なる奴もみるや緋桜のさくら
ともし手にゆく花の風
初瀬見し人しもみるかな
うかれたる人やちるさみ山桜
花のもとにて背負ひ忘れ侍りて
芳手ゆかぬあけきや春の袋
春風に吹出し笑ふ花もがな
よしの花や暮三郎かよしの山
ときはよくみえてふ木やちとせ酒
初物にいのち七十五年ほど
清かしや花なる〳〵清ぬめ妻

先祝や宜竹が尺八千代の聲
家あまた万丸子群集の花見かな
氏もよし生立もよしや藤の棚
随古の對
やまと絵行友かや鳥紀結それ
李下芭蕉を贈る
ばせを植てまづにくむ荻の二葉かな
貞享元禄年中
春立や新年ふるき米五升
庵に掛けて
いくしもをかさねて芭蕉の松かざり

山家述志

昨日は富栄に誇り今日は貧のとし
伊勢の宮家も来りて千代の契
芭蕉庵の雲の小袖をきせられは
昨日からも姿に似せて翁の志
其の跡を慕ひまゐらせ旧友の来りて
酒興しけるに見えぬの屋をもてはやし
物の尺をつして
二日にもぬかりはをしれ花の春
身のむかしの程は降りかゝれは仏の雲の
ミちのくをとても雅
厳島にゆきてみ紀行を志はかりと

京から又和ふ事をとくして
こゝに能見えしあれ人は古きをひなの志
湖水の世の庵に事をむすふ好三
年の日をすて悲田
大津絵の筆のはしめは何仏
人も見ぬ春や鏡のうしろ梅
見られ田舎のまつり忘しけれ
まつしや梅に見さそるさゝの酒
蓬莱に聞かはや伊勢の初便
ふるしに行くゆかむ友も一句
古畑に薺摘ゆくをとこ共
一とせに一度つまるゝ薺の戦

蕣翁子ゟおくれ文の川わこの葉紙
風袁亭
まちえてやさしき此野山の花
大名杖やしれ字を引て一くゝみ
まちあれや名もなき山の初霞
正月も三洗て近江や閏月
うくひすの笠縫しよる枝のむ
おはなすかし
○表るすも慈ゆる竹もやしれ
学や梅のうしろ藪のお
うくひすや鋳ま覚する探り気
ある人の茅の戸と書付けるまてに

あんよしつれし手元しるなとのこゝの
ひとり笛まとめておもひて垣穂
此梅さへうちかくもとこ枝なん
あさしとひひとつれハ加茂のこ隣
の梅そさきふりぬとやまする哉
鳥もしきおひて頃々侍りて
笛まゐ手来し梅まへよそその垣根
伊賀のあへ今し
粧
鳥たちの手も梅手あくまかり
諏訪山隣
梅さわしきのみや都ともめなれ
嫁咲てよそのふる此宿しきか

紅梅や只ぬれ色つくる玉ましく柱
梅折て捧げかゝふ枝一ツ　南
山里も万葉庵し　梅ぞ好む
東良うし
何古人ならの心もしらぬうめの花
卓袋亭月待
月待や　梅のかけゆく小山伏
山家
手洗ふむきよく　梅に倚つゝ外
伊賀の山家にかゝくしなく物あく主居
もてはやして薪とも石とも詠は
本よりあふれ思ひめしてあしき

乏あしらの玉みる梨野也これをまた
て田舎料にて石炭にて物まさいつわりや
侍ちけむ事のみ嬉あけるれにぞ
めつらし
又千句へうゆほる家に梅の花
一とせ都の空に旅ねをしてる花
又行脚の修行知人にあう倚村
此ほとみちのおくへ尺にゆくとて家
草庵をたづねられは
又よく藪の中にある梅のこゝろ
伊賀なりし
おもひ出一もとゆかし　梅の花

網代民部が息雪堂に会て

梅の木に猶やどり木や梅の花

里の子よ梅おれ残せ牛乃鞭

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅

乙州が東武行餞別

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

かぞへ来ぬやしき〳〵の梅柳

去来が許へ亡人の事をいひつかはすとて

菊翁のさしみまさし梅の花

納葉新八去年の二月身まかりしを

一周忌の法にて父梅丸子が方へ申つかはしける

梅が香にむかしの一字あはれ也

しめうく手の心もちも白梅の花

梅が香や梅や花のよそに浪

梅ま手の雪ふる月をいつくしみ

迎ゐのや梅がゝの外の花く

二月末かくて兄梅が剃髪して醫門に入るを聞きて

初午に狐の剃りし頭哉

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像

貞享五年さるとし紀の末行なる宿つ
家隆白洲の末を訪ねて眺めける時
日ひ行ぬひふしのくれなゐ
千声の時かけやくもりしにおほえ
光りも廻ひ申されたる宮やしてかの西行
外宮の法をまうでて境内のやうすを見
しひて内宮の御前にぬかつきてあま
秋志ほはけうもまん侍る
何の木の花とはしらす匂ひかな
裸にはまた衣更着の嵐かな

嗒山旅店

陽炎の我肩に立紙衣かな

陽炎や柴胡の原の薄曇り

伊賀新大仏寺

丈六に陽炎高し石の上

枯芝ややゝ陽炎の一二寸

野州室の八島にて

糸遊に結ひつきたる煙かな

入かゝる日も糸ゆふの名残かな

古畑やなつなつみ行男とも

木曽の情雪や生ぬく春の草

雲雀より空にやすらふ峠かな

二月堂

水取や氷の僧の沓の音

伯淑まて
春の野や花人ゆかし雲の陽
春風やきゝるくゝへて飛段庵
東良行
春風や人なくつる三笠山
笠寺奉納
笠とやもう晴雁も春乃雨
少那西行庵二句
涼みに学子没わす清水かな
春雨の木下につく宿の扉
さくる雨や筵を伸す草の芒
赤坂庵まて

不性さやかき起されし春の雨
春雨や蓑吹かへす川柳
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏
在京等まて
うらみぬ魂子蛾を嫗柳
様姿子対して
あらしのこゝろ柳に手紙かな
古川にこびて芽をはる柳かな
吹かぜにのり陰の花ちるやまぶき
雅杜国
笠の緒に柳つらぬる旅出かな
緑もの子さへる柳のこゝまへのなか

かくのことき柳にけふさる梅ある風
春の雨にも是川の子洞しやうしきれ
ふる流をわかうるる藤又は桜を
子ある花きゝのうるちる中に清く以
安きをやみるけれハ
八九百年にも雨律　松にうれ
蝙蝠もおよらむ寺の花ありて。
世ましきのこともすゝむ念仏やうら
殊にあらハつねにや　もとのやう
奈良七重七堂伽藍八重桜
諏訪山塚
榁の木に花ありかりにぬすみて

湖水眺望
かゝる地の松そもすゝ　眺まする
逢古人
唐ふる川の中に浮かる様なれ
山さそう花ふくもの気比に
毘沙門堂のむ妻四王天の紫花も
うれまくいつくもかまくゑよう人ある是皆
石清水むかし西照院のうへ地蔵を
はらひし　箱頂山よしのうやまの森
駄色枯らし　梅の林中にし思ひたれ
てゆかん花も
観音に蔦又ありつゝ木の坊

花咲て七日鶴見る麓哉

物出自堺

花にあそぶ虻なくらひそ友雀

鶯の笠おとしたる椿哉

芳洗

花の雲鐘ハ上野か浅草の

ゆかりハ檜木とらの中谷の武者のゆき

たゆくきのふハ暮れとして翌ハ

まぶた只生れ一樽のあのしひのお

千ゆきハしよいひとつして弥

貴老の識をとらけぬ

きひしよやちおはよりれあをふり

伊賀の上野薬師寺初会

初桜折しもけふハよき日なり

見みさす桜の中より初伏ゆ

京清も花見の座にハ七兵衛

探丸子の別墅

さまざまの事おもひ出す桜かな

瓢竹庵に膝をいれて旅の思ひいと安

かりけれハ

花を宿にはじめをはりや廿日ほど

同亭より旅立けるに

此ほどを花に礼いふ別れ哉

望のもとに書付ける

芳野にて桜見せうぞひの木笠

龍門二句

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみにかたらんかゝる滝の花

桜狩きとくや日々に五里六里

芳野

花さかり山は日ころの朝ぼらけ

志らくハ世の上なる月夜かな

平尾村にて

花のかげ謡に似たる旅ね哉

大和の国を行脚して葛城の麓を過るに

よもの花ハさかりにて峰〳〵ハかすみわたりたる

曙のけしきいとゞ艶なるにかの神のみかたちあしと人の口さかなく云伝へ侍れハ

猶見たし花に明行神の顔

支考か東行餞別

此心推よ花に五器一具

尾張の門人より濁酒一樽木曽の独活茶一種おくりけるを人々集りて

もてなし

飲明て花生にせん二升樽

去の秋ハ桜に別し志にや

草庵に桃桜あり門人に其角嵐雪あり

両の手に桃と桜や草の餅

東門人

ちりし跡とや人にしられぬ花もなし

湖山の霞まて探幽か画し野の隈

霞む也小舟もおとろく春の夜

信州 吟松斎

鶯の毛むくろふや花の雲

霞浦 みすまうして

西行の詠とゆかしむ花の庵

鳥も似ぬ声なもとも初さくら

句まくへの文字

しるやしらぬ吉野の小桜山桜

花山

花の山 二下のほとりハ大悲閣

言甲子 深川の旅宿にて物

ものしさます舟 金し 柳京

きらしをとハなき宿屋かきぬそもち

雅ぬ春のやみにてよ

花やか宿をみれともひの嵐の寒

上州のものかすまのち佐野わしに人て幕

おさわき物のおか小唄のあるさま也

それからそうの松緑きのみて

より五節は揺ハぬ花失ひてのは

古宮や花は塚もの捨ひとも

おもくはあるへくもの虎桜ちる

隣きしてもの名ハ椿ゆふつかれ

山家

都の宿千鳥の分休ミて松

松月ハ香をうつし気さくら

歌よみの先達ほしや山桜

二尺の闇をあゆみて

うくひすも瀬の花も浦の春

路通亭

残る花のぬるしきをしる霜の夜

伊賀ハ花垣の庄ハそのかみ奈良の

八重桜の料ニ附られけると云伝へ侍れハ

一里はみな花もりの子孫かや

扇子て海をあふけや春さくら

似合しや豆の粉めしに桜かり

芭蕉翁高木子亭

去年の枝花や木深く暮迄て

木のもとに汁も鱠も桜かな

洒落堂記

四方より花吹入て鳰の波

路通かみちのくに赴くに

草枕まことの花見しても来よ

芭蕉翁墓

手しやさくらも能すきもの春

花のかけ汁ハ硯かへしる花うへし

上醍醐

酒とらて山路尋ねむ山桜

古郷にのこみの国中に三月の節をまちて

また雨や二葉にまえる菜の節

いかならん思ひふかまりし花ぞかし

午節や花の法にありて寒行く

木白曇り

そらけふにふや雲雀の桜麻

伏見西岸寺

我衣に伏見の桃の雫せよ

行人八節 咲て ○ 桃の花

尚白と浪華へ下る

此一夜桃にねる木曽の花

古寺の桃に米ふむをとこかな

舟あしも休む時あり浜の桃

さゝげむ桃の宿やむかしの雛

も心すさりし春もまた桃のかれ八

此須住ける庵をおもふ人に譲りて

妻を具し娘孫をもてる人に

持たる人にうつる住八

草の戸も住かはる代ぞ雛の家

重三

青柳の泥にしだるる潮干かな

おとろへや歯に喰あてし海苔の砂
老情
螺よりハ海苔をハ老の売もせて
浅草千里が許にて
海苔汁の手際見せけり浅黄椀
あけぼのや白魚白きこと一寸
常陸下向に江戸を出る時送りの人に
此海の草葉ハ白魚送て我移り行
坎子園淡
白魚や黒き目を明く法の網
よし野をこゆる舟
飯貝や雨に泊りて田植唄

廿六

古池や蛙飛こむ水の音
蛙子の見合し鯰を舟の外
おもふより花や水つきて猫の恋
田家
麦めしにやつるゝ恋か猫の妻
猫の恋やむとき閨の朧月
膳所へ行人に対して
獺の祭見て来よ瀬田のおく
山路来て何やらゆかしすみれ草
悼呂丸
当帰よりあはれは塚のすみれ草
よく見れば薺花咲かきねかな

團角扇子讃をと望まれて

おもみもすさみ子共みなひうれ

菩提山

山寺の少しさ告よ蝉ほり

旅ものゝ利井の撞鐘や山かけき

茶店二句

汲しりけて世かけ午睡さく女

葉そらけ千も見白ふ雉み角

陳菴の信宗波旅手起れゆくも

古案只あそれなふへよ陳ふふ

茶やや茶ふもつふす喝をも程

ふしのまゆらも焼くしぬひとくれ

雪霞も上手休ふたゝしけふれ

ひとく房中の指ゆへきしの客

亡み兼し

父母の忘れす手まし錢その荷

世やふみもきけハ物ゆるしきしの荷

雄からく燎しく加たけ帰し藍

雀子と荷し門すをす亂の家

花子画讃

もろこしの似紙つむ飛ぶ蝶

物ゐゐや白いぬ草手とまる蝶

卜木亭

蝶の物許いく度こゆる塀の松栢

甚よし余か夜すさ露めくる胡蝶
画讃
嵐山や虹よく流れて涼し
西洞
あらしとも山吹咲る瀧の柳と
画讃
山吹や宇治の蜻蛉のゆきかふる
山吹や笑ふまねくへき枝の形
大和川御の射丹波市とかやいふ
家をもしりの流れすらる茸の光
虫をかく咲く摘桃をるを
草畑さく高のうちろや藪の花

草枕ふむ四谷るとり綫芋屐
峰入や一里おくれし小山伏
此節まされる茅舎の画讃
草さく花紫やさしや神の花家
藪桂門を草のそのまて瓦
二条軒
遊龍尚舎
物の名を先とふ荻のわかの葉哉
ゆくまて和哥の浦より追付る
菊翁
行春やさら鳥の肌の流
田家に辛夷の花を作

入あひ鐘もきこえず春のくれ
鐘つかぬ里は何をか春の暮
望湖水惜春
ゆく春を近江の人とおしみける

翁讃
あら道て隣の梅を折てゆく
自画自讃

来方ゝ残やてしも身の玉
えだやおもくはさびし 秋のくれ
四方より萩も志らもも須磨うれ
鶴ひくあふぎ来えてぞ流浮魚
上野の無
花ヶ瞬ゆり羽織きて詠れ精才女
衹若のみちのく行を送る
むく起ず陰の竹はめくらひの旬
埋忠和尚を悼
咲よりもちれ梅ずよう花のわかれ哉
袖よごすらん田螺の蜑の隙をなみ
まかくるゝ猿よりもつくし

精霊

まつはれ蔵しておもふ盆

怨龍に象して勝るゝ筆の心縁す

まつしかれハ

君や蝶春や菜子ハ着くて後

羽次の手長る佛頂猪浴の小庵

をまくて

留ちて来て櫛さのしまる夜の露

発句夏の歌

寛文延宝ても乎井

帰やあけ舟のすゝある係とき江

対気かうりく方麦あもむく尾花

ロす扇差油角那れわとしまけ

戸の口年宿れきのれ郎な

黒蝶釜とりて松くりゆくきれ

志け耳をきつや得ゝきすゝ季

子釈正月のえ摘乃花さゝり

清くかむ舟千魚蜂く郎な

岩流こし波る海やほとくき朱

菖蒲生き折のいせしし　鋼譲

見すしらく荊をつゝむ袂かな
葛の葉似よりや似よりの霜の露
財ゟいかゝさ飾法師年の暮れ
五月の雨実蛙鳴の聲いつまでそ
さみだれや物干竿や月に急
時鳥や耳をすまする梅の雨
五月雨も瀬ぶみの音ぬみだれ川
さみだれや靄燈(ともし)付る青太郎
さみしき旅や小笠着たる傍しも料
こゝも三河むらさき草のあやめ哉
楼の窓や花を尋ぬ堤の　丈羽　風

名取八仙の内　二句

秋や浮世次第や秋しる妻の私
汗をやよし旅浮の筏ゆへ仏
夕にほのか見えとてや夕がほのはなの花の
ゆふ顔の白く籬の浪蟋蟀・蝗はて
秋風生る石にきこゆるうる調して
野分けあとれ
いてや寄よる布晒す蝉衣
雲の汀の鮎左龍の岸月の鯉
蔓しきものめ追ふや床さうし
笛押よらちく身におぼえる春
闇ご、蛍(コホロ)秋下おもふ五衾
梢よくもんと見る後のかゞ

小夜の中山にて

いのちなりわつかの笠の下すゝみ

不卜の母追善

あ[illegible]けさ[illegible]

[illegible]

苦吟

[illegible]

貞享元禄年中

ひら川[illegible]ひめ更衣

[illegible]

灌佛のをりに生れあふ鹿の子の寺

灌仏や皺手合する数珠の音

招提寺

若葉して御目の雫ぬくはゝや

日光山

あらたふと青葉わか葉の日の光

裏見の瀧

しはらくは瀧に籠るや夏のはしめ

[illegible]木啄や四月の[illegible]

甲斐山中二句

山賤の頤閉る葎かな

ゆく駒の麦になくさむやとりかな

青さしや草餅の穂に出つらん　翁

逢素門

はさまりて穂麦吹入る草枕

五月十一日武府をたちて故郷に趣く

人々川崎まで送りて餞別の

句をいふその返し

麦の穂をたよりにつかむ別れ哉

麦の穂や泪に染て啼雲雀

悼大顛和尚

梅恋て卯の花拝む涙哉

其角の母五七日追善

卯の花も母なき宿ぞすさまじき

このほとや松の林のひこし

尾張より東武に下る時

牡丹蘂深く分出る蜂の名残哉

桃隣新宅自画自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

大坂にて

菊に出て奈良と難波は宵月夜

山崎宗鑑屋しき　近衛殿の宗鑑

が姿を見れはがきつばたと遊ばしけるを

おもひ出て心の中より

ありかたきすかた拝まむ杜若

鳴海知足亭

うまつくさ我に岩句の袖ひかり

帰華

あらいかさ風をとらへさは

こうれとや笠ぬきさけて羽織

大垣の珠之君　日光御代参勤を

おふせ庵従ひつゝ宮田の綿薬の苗

篠の露移こくの行し夏ひかし

嵐山萩の花りや風の筋

波麿

ほとゝきす靄紫蔭暗き木下闇

雲岸寺

木つきも庵ハ破らぬ夏木立

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

別旧友

二またにわかれ初けり鹿の角

子規啼や黒戸の濱庇

橘やいつの野中の郭公

須磨にて浦の吟　二句

須磨のあまの矢先に鳴や郭公

ほとゝきす消行方や嶋一ツ

裏見の瀧

ほとゝきすうらみの瀧のうら表

みちのく一見の桑門同行二人那須

絵馬の亀も若く夫銭殺生石尺
むしの聲竹も涼しく雨ふりかかれ
先みなもとひとつより江
荒木の宮も人の衣をほしさまて
雛次郎まま
稲を積ひて田のむけよ郭公
時鳥鳴くや夕乃上
一羽の江戸横雲ふや杜宇
家ありも家ありのしや雨鳥
蜂塚もて
わかきす大竹藪を生も秋
時鳥鳴きや五尺の竹やぬ草

さし竿売る扇子
鳥忙しき竿や桜けむ柱もきれ
仙其のそき
田や青や中ま市の時鳥
なけほのやまく鶯の杜宇
不卜一周忌琴風舞行
時鳥鳴くも青や古き硯箱
知らぬ花さいしかれといへの八
木隠れの鶯も哉や郭公
鳥賊売の声や雪降りし時鳥
すまの此所に入さ
雅河須や花のちらぬの蓬の句ひ

蒼柳舎

柳のもと背をちの小料理の百

芭蕉ハやすらひそ

とへらりと棟や雨ぬ花くもり

白けしや附る力茶の咲つゝ森

鶯杜園

白きしに羽もく蝶かのよみか

次慶

海士の魚まりえしてやけしの朱

伏水亭

雨折し里ふたゝ夫子菌か

芦曠

田一枚植てたち去柳かな

奥州今の志ら川ニ出る

爲の比のしのぶ川より出るも風の志

早苗より衣を思ひ見るの歌のあ

みちのくの条し出るにも先関屋

の跡もつのしきまでいふこゝにて今

は白川もこしぬ路の岩瀬のほとり作

草庵の芳飛を打かの陽関は

かの故人に逢ふべし

風流のはしめや奥の田植哥

志のぶの歌なれの里とのや文字摺の前に

とさ方二所とつらふ石の乙女の

昔の名ハ生子を西ニ文字のよくみ山
草すみのこし名を立てかえてさくらの
よ見へ今ハ名のみ切れて名の西ハいさかに
來られハさきの風情もたえて作りしも
うせ菅笠さかりのしけ栞ハ
さかへしるそえや世のしたの小瑠
尾張の旧文字寄す
世を経て代々の小田の刈り取り
荒田や岱の亭
案つけし字の弥や田植ゑ
昼大来しハ旅の苗ゐの日
草の葉を遠きよりて茂

本多緑の松風ひをてて大津とともある
瀬田の亭をみて西
けなるる田毎の月をそらして見え為
上林三入亭
蛍見や樽郎酔て覚来れ
林の子火をと木々の宿や花のやと
秋ニ訪をそ往在年ともめし
名為をそ始めのちひさなを残も
ましけり後の其ひハ其
るほとの名涼もの住ミ月も
柿ひやみそ今ハ満むろしの中ニ
笛をかもし一人の世の葉をしるとや

鴫生角かゝりけり渡り初めし

従ひ本宅に訪ね起る時ニ句

しれ人の好もうれしく本宅の城

樅の木も生えて居ても似たる本宅の松

尾花の山家

豊ましみ下の扇すゝ

清風亭

大比叡かけ風らいのひとつの森

竹の香や松ふく時は緑の末より

小鈴塘まし

しれかしや葉とし成る人の果

中にゐ松ひし深川の庵をこそ思ひとて

京へ多や竹の子藪すゝめしや

木園亭竹睡々

鳴きもし竹植るれてみのとし笠

竹隠居

吉の人乃見ぬ花や鄙の家

又ゝえむ小花の中に松江川 松魚

うれしき音の見る人を越かくむ

頭舎ゑいきもしむきん静松色

やみの花や常をおもしけてゐやら

志ゝ川に住何之文をつのえすは

舞中も荷えしの銀をとくしもの

大津湖仙亭

此宿そも数しらぬ處にあれは
露川とともに佐谷まて送りして
仙台隠士六雨やに寄りかゝり宿す
まて館をも人の心や佐谷にて
武隈の松にて
桜より松は二木を三月越
みしらぬ花や鈴鹿の鈴に耳よつく
俗士にはさかられし五月四日吉家
赤かしく尺寸もあらんや飯まとにて
花あやめ一夜に枯し求馬哉
同じく
あやめ草足に結ん草鞋の緒

ちかひ詮行にてたゝまむ鶯数
病中自臨
螢出て窓穀青し五月雨
きみしれすかゝるぬまの瀬々の橋
於武隈川の水源にて
五月雨にて瀧降埋むみかさ哉
醫王寺にて
笈も太刀も五月にかされ帋幟
笈中於さるゝ野つゝの八字より一里
そろりと畳ふ子和にけゝしいへ
きみしれ路つゝきさくみちもいと遠し
きれいはれるくたるしき通りぬ

笠しまハいつこ五月のぬかり道　芭

中尊寺にて
さみたれの降のこしてや光堂

もかみ川　二句
五月雨をあつめてはやし最上川
風の香も南にちかしもかみ川
日の光やいつれをみても五月雨

信濃の浅間
入梅も継めわるし雨やまちまれ

落柿舎数被
さみたれや色紙へきる壁の跡
五月雨やかひこ煩ふ桑の畑

嵯峨川にて
さみたれに鳰の浮巣を見にゆかん
さつき三日の不二の曲ひかしこに
目にかゝる時や殊さら五月富士
五月の雨風しきりに落て大井川水出たりけれは島田に逗
留す如舟如ぬ体なる其人の許にて　二句
皆ハきし青葉かつて茄子汁
五月雨の雲吹おとせ大井川
楢山や嵐して来る夜の雨
那須の光明寺にて
夏山に足駄を拝む首途かな

また山や杉すゞしみに一里程

夏山や蕗すく里で食時分

蚊遣火や蛙子時分ねす浴衣
子珊亭うし

蚊遣火や藪を小庵のおさしき
重衍亭主人

涼しさや山を出羽のこく荻子

耳の穂まで皆何うし大垣の旅店を訪
見付しにかの蔵書ろみさこの夜以
きん花に宝栄のむすしき見以て

春の宵ハ他許手さを菊花の縁や
正盛之綠

鐵肝石心此人之情

名残しさすうる涙や楠の露
弦てあん拝す咲る石卍上
守鉛うし

夏草やつはものとも夢の跡
殺生石にて

石の香や夏草赤く露暑し

寺涼やまのあのむみ舟ころ
清風亭二句

行末は誰肌ふれむ紅の花

眉掃を俤にして紅の花
己百亭

やどりせむ藜の杖になる日まで

前書の如し
稚きものをうしなひし人を悼みて

もろき人にたとへむ花も夏野哉

粽ゆふかた手にはさむひたひ髪

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

能なしの眠たし我をぎやうぎやうし

稲荷山にて

撞鐘もひゞくやうなり蝉の声

立石寺にて

しづかさや岩にしみ入蝉の声

無常迅速

やがて死ぬけしきは見えず蝉の声

盤斎うしろむきの像

世の中をうしろになして山里に
おもひいりてもすみぞめの袖
とよみけり

団扇もてあふがむ人のうしろ向

壽香亭にて

鼓子花の短夜ねぶる昼間哉

ひるがほに米つき涼むあはれなり

子どもらよひるがほ咲ぬ瓜むかん

平田の李由が許へ文のおとづれに

ひるがほに昼寝せうもの床の山

名のみや醜て臭ひする盈の乳
中ぶらりに千瓢なりて並びけり
住なる人の都に隠れて岸生志道
る古跡を訪ひて
瓜作る君があれなとゆふすゞみ
河内枚波の里にて古き長瓢に瓜の
花をいけて下に学弦の蔓を一重
て花生なる岸の雲を撥向きて
瓜の香や志川くりのするわかれ芋
岸摘なるのしの葉ゆかり画しく
鶴拾山の松の下納涼して長年の
蛙をとなくきむほと

山ふけや夜を篝火ん瓜まもり
花と実と一度に瓜の盛かな
行住庵にて夏の夜
夕立にもまるつけ瓜のそれ
細長葉の花やさかる喬輪を学
古木の葉の棲まし
新瓜に花盛りて涼し瓜の泥
柄骨解行は露八寸して古葉
ちゝ乞に斜して
秀に細れ二つに割し古葉瓜
瓜の皮むいさ零や岸基
慈照亭ふし

夜の秋や崩れて晴し冷し納
き経蝸見えとひの帰る清水かな

岐阜山にて

城跡や古井の清水先づ問む

殿次の温泉の神は家に八幡宮を
遷しまつりて本社一方に有れけるに

湯をむすぶちかひも同し石清水

餞のうきや盥に汲んくる清水

次戸二句

月をみてや物より八尾やの后ある
月をいそれと岡宝のむかし次戸の夜

明石秋泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

年をかけ八幡子のかゝらぬ有明

夜の秋やこゝろよかりし鶉の声

夜の月博多埼まわりて赤坂や

晋の洞明をうらやむ

見あらしに屋や柳の葉やたのむしろ

秋霽に人の住まはぬ離居り

山も庭もうこきて入るや夏座敷

井稜丈水楼

寺の夜や湖より寄す浪の上

冬もしれぬ鶏何といふものを見

侘びんと芋のみさいはまかりけれに

人しいまた山の木のけに席を設け
居をしつけて
又たちひきのしみ川の手道　鮟
しづかなるは里てたのしき物をさ
なかしろしてやうし出しき鷄舟に
おもひ合するの春千雪の流しよ左冬
家居を離して　二句
ひらしとゆくる扇や雲の錦
葉のまて月をのよろこびや雨の鼻
枝まて去年のかけぬ葉もの苗
雲の上の川に蒲れて月の山
六月や峰に雲たく河しし山

春雪月や朝は絶ても涼　鯨
涼潮や浪に走らむ青松柴
みかん月のふく雨やさみの限このまも
かゝりぬ絶ぬ涼後もぬかに秋に
松風の花散葉このまれあるすゝし
石川文山の像
風の流るる羽打は襟をつらぬ霞
其考
并
夢さハ夜もかみにけ羽打に
小倉山堂寂ちうそし
松松をたゝめてや風の葉子
雅力亭　二句

さゝなみや風のかをりの相拍子

湖や暑さを惜む雲の峰

蛤の口しめて居る暑さ哉

汐〻に日の影や鶴すゞみ

湖漾齋石

わけ登れば杉の中山すゞし先

手すさびにこゝろを書てみの家

よき木は寸へ下つかり紀行ろ

あき人の小袖もいまや土用干

十八楼記

此あたり目に見ゆる物ハ皆涼し

清風亭

涼しさを我宿にしてねまるなり

皿鉢もほのかに闇の宵涼み

羽黒山にて

ありがたや雪をかをらす南谷

涼しさやほの三か月の羽黒山

文鱗子が此山の縁を慕ひ訪ければ

南無佛草の臺も涼しかれ

新庄風流亭

水の奥氷室尋る柳かれ

袖の浦の眺望

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

寺島彦助亭

笑ふかことく海に入りてもらみ川
象潟や雨に西施かねふの花
汐越や鶴はきぬれて海涼し
あけ汐
きさかたのさくらは波にうつもれて
花の上こく　海士のつり舟
花の上こくとよみ給ひし古木の桜
も見えて蚶満寺の古き跡残りて
汐波をいさゝか隔てゝ残れ共
夕晴や桜に涼む波の花
小鯛さす柳涼しや海士か軒
川中の根木によらん涼み

四条の河原涼みとて夕月夜の頃より
有明過る頃まて川中に床をならへて
夜すから酒のみ物くひ遊ふ女は帯の
結めいかめしく男は羽織長う着なし
て法師老人ともにまし(は)り桶屋鍛
冶屋の弟子子まていとま得顔に
歌ひのゝしるさすかに都の景色なるへし
川風や薄柿着たる夕すゝみ
曲翠亭題田家納涼
飯あふくかゝか馳走や夕すゝみ
雪芝亭
涼しさや直に野松の枝の形

野水軒秀
深しされ杉間より見ゆる作ゆるの月
東武より上りて人しれ對す
東路の毛膽とろりし床まくみ
硯水亭
深しさ残紅葉しろ峰嵐の竹
あなくさしあ楚忠ら上野龍の袴
大津木節亭まれ
秋ちらなとて路のよるや四葉草

春讃
菅原信出摂
みえるや紅葉まし乃床しさん
長貞亭
海ハさて探さ江の津の島五月紅
松窓
窓しやそくすくるて夜の海
松しかやあをたまかの月
野明亭
清瀧のそとみよきく心た
岸心の村
我ハち枕さ里一風の村 淡 緑花

秋虫様　扨も取手紙とゞけたのしきや
なとゆすの句もられハ
きみされて宿はかゝり旅ゆすき
李青く朱塗　併く石河ふ多し
唐人と信州まての咄多く
みつかやしまの春りうき鶏舟帆
　究明るゝし
汗の垂手家ふらむ行光書

発句秋之部
　寛文延宝天和年中
猿めかの猫子見しゝうのか秋
秋来ぬと耳もとあらく枕の風
秋来ぬと東に浮しや唐の波
見学ものゝものかなしての川
月すや燈の一藏男七夕
七夕はひとぬくころや雨中天
　名所八体の内　二句
星合の中ゝや弦まむ龍田川
八跡やつの橋立たゝ又関斗
　憶元杜

盤風もし吹て音ハ秋霧するハ後の見え
三日月や秋の浦の夕はれむら雨
月をこゝろをさめひ梅をさひく
こゝろしらへむしきれと田人もなし
あ行はいして
代てすみん月見宿　奈良の坊舎
見渡をハ須磨ハ大津ハ湖水の秋
六角堂清の二人千草薙を訪れて
古郷の安房を見ず
いく千里舟の川もみひや秋の海
首夢や花くも出羽のすまひ取
画賛

朝顔や千尋の花波ぬへし
蜻蛉とまるも身とは秋の風
松虫塚
松あれや恋かへ吹きゆくえのほとけ
萬草萩や露見札花のみち
よるをたゝむ一葉や虫の旅寝して
月はむかへつれてそそれひのやと
桂男すみか見えにけり雨の月
廿日はたもや見の秋三日の月
新八天の下てるひある月の影
宿や月下の子ゑの通り町
きつくや豆腐よもちもすねる紫

秋のきのやすらのにやとらのり哉
こ能もおうし水生木やまみち鮒
武蔵野や茶道仁義を先とし政以也
歌先とはすとかり
名月のむらや五十一ヶ漂
重しと名月の松や兎印山
鯨うや江戸をそれかれ山の月
木を伐てもしは只もやうふの月
有蘭　草　菊　宜　止
職之や肩に椎打うつ衣
武蔵野や一寸ほどれ森の鹿
萩のあるうつや秋風のはらし

又ぬらぬいつはせうひて火中秋
後家の秋物のゆかれをとゝめさう
空の旅をもつてかなし秋のくれ
雨の日や安宅の秋を堺町

茅舎の感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉
とうてよ哉はゐのり尺る声百ヶ丸
ゆれかうて牡丹もよきや牡丹花
秋に霜千虫は月下の葉を穿つ
息安葉十を寞途よ紅や秋の暮
秋のくれ男は泣ぬものなれど
花本櫻　意み可なし　可南

唐黍や軒端の荻の取ちがへ

重陽

さかづきの下ゆく菊や朽木盆

近江路を通りけるに稲の穂の出かゝりけるを見て

かしらのうへのきぬなども

稲く

刈あとや早稲かた〳〵の鴫の声

貞享元禄年中

那須にて

初秋や海も青田の一みどり

ゆく秋やたゝみ重ねしこれ蚊帳の縁

直江津にて

文月や六日も常の夜には似ず

出雲崎にて

荒海や佐渡に横たふ天の川

合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ

素堂の母七十あまり七とせの秋七月

七日にてかぞふるの家々の七株をうへて

髭となる星につらなるもの七人の詩歌

をのれをすゝめし文七思ひの外かくのごとし

七株の萩の千本や星の秋

何のしかも代なを随分しと四季越

くに人に
七夕やさゝの硯に係旅
帛雨星
雲水も行しも紙商や岩の上
妙童寺にて
七夕や秋をさたむるはしめの夜
当麻寺にて
僧朝顔いく死かへる法の松
錦とほのいれきり一口入阪の論り
嵐雲ふ西に鎖戸にのそはし
鶴鳴の其声に芭蕉やれぬへし
更科紀行追

蕣は酒もりしらぬさかりかな
閉関
朝顔や昼ハ錠おろす門の垣
朝顔やこれも又我友ならす
和其角蓼螢句
朝かほに我ハめしくふをとこ哉
丸岡の天竜寺にて金沢の北枝とお
わかるゝ
物書て扇引さく名残かな
何某亭にいさなはれて
秋涼し手毎にむけや瓜茄子
粟津の庵にて路通の旅を

ひやしと聲をふるへて座敷に

寄李一

稲妻をうけとるやみの紙帳かな

宮敷賀

はしやくそ稲妻をかの川たよりかな

床知識のみさきちくらく弥陀大神の基

とのやいしまつらくて

いれつきて怯しぬ人のたのしさよ

稲妻や雲の方ゆく五位の聲

おもしろう知をれ骸骨とものの箇毅をかゝへ

まくら能すら和ぐし遍て葬甚の根をくれ

みけりまとに生死のたよるかれなりと 云

此頃ひやてしたふらまやかの網膳を

枕として寝ころびてをわかちさるの

も只此生死を亭さらしものし

いふまあやかに尓の家にすきまの鐘

より西行庵にて

まとくし試て浄土すゝるもや

画讃

あけの蓉難をそらすれ松の露

吉良すおる

うかりや書付けさむ笠のな

二人の浦くし

呪ふし捨ふやく浮世不のつゆ

崑崙ハ遠く蓬莱方丈ハ仙の地なり
まのあたり士峰地を抜て蒼天をお
ほひ日月の為に雲門をひらくかとも
うたがはれおもしろして美景を盡す
詩人ハ句を案じて才士文人も言を附
画工も筆を捨てけるとかや藐姑射
妙巧の仙人作りて其詩をよくきかむ
其画をよくきく翁の
雲霧は晴時百景を書尽しつゝ
霧晴み雨不二を見ぬまておもしろき
秋海棠西瓜のはなより咲けり
玉川の水手おも見てたどるかし

ひよろひよろと尚露けしや女郎花
くすし何かしの像
むら雨を背中にうけて案山坂
高上の吟
花さきぬ木槿そ夕暮涼れけり
高田醫師細川青虎亭
茶摘ていろ紙のもとき筆枕
加賀国手入
不縁の手やうけ入拾ふる浅海
小松ときゝものさまて
さほしかしき名や小松に萩のせき
萩なかや一夜そやとき山の犬

欽小亭
ぬれてゆく人もおかしや雨の萩

種の浜
浪の間や小貝にまじる萩の塵

いろの浜
小萩ちれますほの小貝小盃

画讃
しら露もこぼさぬ萩のうねりかな

ひとつ家に遊女もねたり萩と月

萩書て言ふ身 予の庭前の萩作りしを
見て
風いろやしどろに植し庭の萩

敦賀なる禅院
門に入れば蘇鉄に匂ひあれ

悦堂和尚の隠室への程て
香を訪ひ 茶性 茶はやどりけり

茶店にて
茶の香や蝶のつばさにたまりけり

遊女の画讃
枝よりも折ましものを芙蓉かな

きり雨のやさし芙蓉の下葉かな

茶いろくし秋のしら花はさみけり

此寺は庭一盃の芭蕉かな

秋草菴

芭蕉そし角力取草の花乃露

伊勢おの斗従と山家を訪来て

蕎麦ハまた花てもてなす山路かな

三ヶ月の地ハおほろなり蕎麦の花

元足の守金大夫か新宅を賀す

よき家や雀よろこふ背戸の粟

初秋中の一日或寺に遊て素絃の題をさくりて

名のはや秋をいろとりし錦の菊

かゝ玉をさくる

熊坂か池うつりや州の玉露

鳥羽山

玉ちりて乱ぬ棧橋のゑかりけり

尼寿貞か身まかりけるときゝて

数ならぬ身となおもひそ玉祭

蓮池やをらて其まゝ玉祭

甲戌の秋大津に侍りしをこのかみの許より消息せられけれは旧里に帰て盆会をいとなむとし

家はみな杖に白髪の墓参り

髑髏の讃

夕風や盆挑灯も撤たる縦

むつかしき秩父殿さへすまふ取

許六か画に

晴角力小川を上る千栄の食

庵にうけんとし句帳を書とゞむる迄

孫の絵手

秋のいろぬかの味噌に顕れけり

志川うきや絵の具塗りきうしけり

気さ寒宵やみをし法の声

床下来ていはよ入やきりぎりす

新酒して手習すむ夜長くけり

古内の神社にて

むさんやな甲の下のきりぎりす

白髪ぬく枕の下やきりぎりす

さびしさや須磨にかちたる　蕉

草の戸に住てゆく秋の風は也

けふの月それ友なしの方へつうりけり

みの法は言まで此の米より学は庵

蜻蛉や取つかんとし草の上

朝晩もなくして秋の葉法師

老の名社ともしくして四十雀

田中の法花ちりて出ひて

荷物や子猫かへしの時の声

田家

かゝしけし田面の鳩や里の秋

桜の家ある様子の羽音や飢わたし

田家酒家

桐の木に雁ねかりなる塀の内

竈の周もいきや雪ぬるし峰　鶴

稲すゝめ筝の木たゝけや也雲

青くてもまへものを芽有　椒

かくさめて椀の葉汁に良かりし

丈風にあしきも新し良かりし

木曽塚の旧草に花さく敵戸の人こそ飯す

草の戸をきれや猪鼻に良かりし

　栃浴杵え

菊柳ゆきしも香も猪をは

　金昌ちくゝし

庵掃さきもや精舎　其　栃

画讃

錦浪や原の末々村も浅霧し

　望日もし三ろ

痛みは秋空に落てて旅もこうれ

海士の家を小海老を虫しるいとよ行

周り可ろ雲やしはしのてるらる

　奈良すし

いはし峰は虎茶を出しよまて雁

いてしれく蓑猪　椿つむ葬の谷

作利他端や三度起てても落し水

枚の行状をいふ筆流を吾く

栗稈手まりしくも瑠ふ谷の花

　故人を毎て

冬瓜や互にかはる皃の形
雨竹舎

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ
山中十景髙瀬漁火
かゝり火に鰍や浪の下むせひ
嵐雪か四国に渡る時
旅鳥二百十日も船支度
みの虫もとしも千鳥のそこまゝ
吹飛されて此日の暴風かな
之は月やさやかに浮る峯の霧
小夜の中山にて
まつ一輪さく月をしく家の蝶

祢須山にて
三十日月なし千とせの杉を抱嵐
我翁やまさに百歳も宵月夜
やそおし人を休る月見かな
いまこの處に旅して舟の中より
一夜を語りて暁の雲隠るかなし
きさしむ了
ゆくくや二十七夜も三日の月
川舟やよい茶よい酒能月夜
其頃のと人千尺しをして月見けり
古戦場古塚を拝して
月やその跡の木はなの石共に

姨捨根本寺にて 二句

月くやし桜も雨を持ながら

寺は岡にまつ白ながら月見かね

田毎にて 二句

鉢の子や稲もうけたる月を見る

いもの葉や月待里の焼ばたけ

大宥根成就院より陶府

行年は又上手も似らぬ口の月

あれ中に翁結としく寝の月

姨捨山にて

俤や姨ひとり泣月の友

いざよひもまだ更科の郡かな

善光寺にて

月かけや四門四宗も只ひとつ

仲秋の月は更科の里姨捨山に慰めかねて猶あはれさの目もはなれず

ながら長月十三夜になりぬ

木曾の痩もまだなほらぬに後の月

浅水の橋をわたる俗にあさうづといふ

清少納言の橋はとありし一条ゆきもありの

ところなるとぞ

あさむつや月見の旅の明ばなれ

月見せよ玉江の蘆を刈ぬ先

湯の尾峠に

月に名をつゝみかねてやいもの神

燧山

義仲の寝覚の山か月悲し

気比の明神

月清し遊行のもてる砂の上

敦賀夜泊

名月や北国日和定なき

濱

月のみか雨に相撲もなかりけり

仲秋の夜つるかに泊りぬ雨降けれは物
かたりに此海に鐘の沈みて侍るを
国守の海士を入て尋させ給へと龍
頭さかさまに落て引揚べきたよりもなしと
聞て

月いつこ鐘は沈る海の底

木因亭にて

隠れ家や月と菊とに田三反

斜嶺亭

戸をひらけは西に山あり伊吹といふ花
にもよらす雪にもよらす只是孤山
の徳あり

其まゝに月もたのまし伊吹山

伊勢の国又玄か宅へとめられ侍る
其妻の男の心にひとしく物毎まめやか

兄人が從ハ旅の心を安くし侍りぬかゝる日向
其の妻髪を切て席をまうけられし
心ばせ今更申出て
月さびよ明智が妻の咄しせむ　翁
悼老流て寄法師
手雲を雨足にへも法の月
名月や蜘くさくも瀬田の月
兼題
夜うけて明月黒む渡み哉
折出の濱にて
はさらひや滋むる径との宵の闇
既白賦二句

顔明て月さし入よ浮御堂
安しと必ず居さよふ月のやど
正秀亭初会
月代や膝に手を置く宵の宿
古寺翫月
月見する座に美しき貌もなし
月見の雑
米くるゝ友を今宵の月の客
義仲寺にて
三井寺の門たゝかばや今日の月
名月や湖のむかふ七小町
名月や兒立ならぶ堂の縁

名月や郭縦宮しをま千湾

名月や影を筆架のこけおとし

名月やつゝの家に流る川流坊

清之

見なつかしくて搗る杵や臺の月

紫のゆかりときけハいやしからねとも

安井らのもしき物ならんとよ此季ハ

東山に住る僧をとふらひ西行上人此

よみをすなへし山家集のきこえもあり

明の事はよしかやとみもしくてある

草庵の坊につかりしける

宗の戸に月やさてる孫陀坊

石山に詣りける芭

梢柳秋のみハ月秋名残の寺

旅宿の長衣

こゝの名ひ起ても月の七つの鐘

宗川

名月や門にさし来る潮かしら

桂ハ松風の情を削て住ひれ

曽良然るを物数奇を使にて名

月のよすがはひとつと芭蕉又まとを

栽しる

またも蔵きを植けん芭蕉庵の月

宗川の末五本松とて家に舟をさして

川上と此川下や月の友
いさよひはとりわけ闇のはしめかな
嵐蘭初七日追善
見しや其七日は墓の三日の月
東順傳
入月の跡は机の四隅かな
岱水亭にて
影待や菊の香のする豆腐串
伊賀の山中にて 二句
名月の花かと見えて綿畠
名月に麓の霧や田の曇
無名庵にて

今宵誰よし野の月も十六里
住吉の市に立て
升買て分別かはる月見かな
畦止亭題月下送児
月すむや狐こはがる児の供
女桝亭にて
秋もはやはらつく雨に月の形
名月や池をめぐりて夜もすがら
山寂しや心の庭や其の月
あの中に蒔絵かきたし宿の月
かけはしや先思ひいづる駒むかへ
桟やいのちをからむ蔦かづら

芳野夜泊

襟寒く露に咽ぶよや坊かつ月
春の浮す小斗ゆく襟かれ
猿ひなハ猿み小袖をきめさね

千里か旧里まし

跡なや蝉壱ず熊むかのねく

慶牧亭まし

菊植て休は五本のあしね
神の宮の多房に菊も多のつくり
菊の葉も哀しめむる紅葉かな
鬼灯ハ家も紅葉もかしもまみちかな

よし艶まし

住庵手を繕て声の下ハ何をと思ふ小草

母の白髪とし柿のみくミて

あたしハ涙ん流て浮川お秋の露
初茸やまさら数繕ぬ秋のつ由
松たけやしらぬ木葉の風そら付
松茸やかみれなけとハ松の能
茸狩やあふふれる足の夕日哉

聡水不楼

蕉翁の木の実芋の実捨ハや
木魚の橡うき世の人みせ庵かれ

李内玄本の二人牙

菊葉と柿とうれしき芋の花

氏野亨翠亭

里ちかき榎の木折ぬ露もなし

赤ふ柿や一口ハ喰ふ猿のつら

堅田桑淑可休亭

祖父と孫子は庭や柿みのん

楼や倚ぬれ白子の露ちらし

何喰さ小家ハ秋の梢のけ

秋もさ経守嬉しき冬や菊の香

草蓊の雨

起ゆるる菊かのしきはほと

友梅亭主人

大やくさけれまもなつのし花の菊

筆泥のまま狗まさハ菊をとゝまきのみ六

龍山の家をひらきけるに千海比

結ハれをきすゝめて程咲なるふれ

よふす社稀ふ晩年語のすゝめ

ふしき花を哉

咲さよひのいろ縦のゝ錦を誇る菊

山中の温泉にて

山中や菊そたをらぬ湯の匂ひ

紗行亭主人

痩あみのしるきふる菊のつぼみふ

葉のかなか花てひろくハめくのこ比

田なか年尾了

稲こきの姥もめでたし菊の花

堀田の何がし木院醫師の兄の亭に招
れしにころの菊をたてゝ庭をもて
みされけるは紫葉八結の中 菊葉花なりけ
いと芽しかりければ

蝶も来て酢をすふ菊の鱠かな

九月九日乙州が一樽を携へ来りければ

草の戸や日暮れてくれし菊の酒

尺ばかりの杉れやのこむの後の菊

八丁堀にて

菊の花咲くや石屋の石の間

大門通ところ下

菊は古物店の背戸の垣

園女亭にて

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

奈良にて二句

菊の香や奈良には古き仏達

きくの香やならは幾代の男ぶり

えらこの吟咏にて

菊の香にくらがり登る節句かな

生玉辺より日をくらして

菊に出て奈良と難波は宵月夜

菊花の讃

折ふしは酢になる菊のさかな哉

江上の破屋を出るとて二句

野さらしを心に風の志む身哉

秋十とせ却て江戸をさす古郷

悼捨子

猿を聞人捨子に秋の風いかに

義朝の心に似たり秋の風

秋風や藪も畠も不破の関

身に志みて大根からし秋の風

一笑追善

墳もうこけ我泣声ハ秋の風

途中

赤〱と日はつれなくも秋の風

牛部屋に蚊の声弱し秋の風

那谷観音にて

石山の石より白し秋の風

贈桃夭号

桃の木の其葉ちらすな秋の風

中村をさして

秋の風伊勢の墓原猶凄し

旅うきの吹ども青し栗の毬

座右の銘

ものいへハ唇さむし秋の風

暮秋の景しきを

秋風や桐にうこきて蔦の霜

伊勢紀行の跋

西東あはれさおなじ秋の風

悼松倉嵐蘭

秋風に折て悲しき桑の杖

野水の旅行を送る

見送りのうしろや寂し秋の風

曲翠亭題夜寒

煮麺の下焚たつる夜寒哉

廉直神前

此松の実生せし代や神の秋

菊花

道ほそくおゝゐて果ハ木草の秋

さしこもる秋より月もひとつ隣

種の浜にて

さびしさや須磨に勝たる浜の秋

幻住菴にて

旅痛いや家うつる秋の山

小名木沢桐奚興行

秋にそふて行はや末ハ小松川

旅懐

此秋ハ何て年よる雲に鳥

車庸亭二句

秋の夜を打崩したる咄かな

けふよりハ秋也ふてよもすがら朝霧

きのふ人し青梅ハいやしく朝起ハ
せはし
神もしらぬ秋の新酒や亭主かな
本因亭にて
郷もたぬ旅寝の果に秋のくれ
いく秋かみせすして瞿麦かれけり
深川の庵
桃印の庵寂しさ一しほ秋の夕暮
枯枝に鴉のとまりけり秋のくれ
雲竹の像
こちらむけ我もさびしき秋の暮
所思
此道やゆく人なしに秋の暮
け秋やおもて引まはる三方荒萩
蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ
内宮ハ事をさまりて外宮の遷宮を
をかみ侍りて
たふとさにみなおしあひぬ御遷宮
ゆく秋のなをたのもしや青蜜柑
芝柏亭にて
秋深き隣ハ何をする人ぞ
清水の茶店に遊ふ
松風の軒をめぐりて秋くれぬ
行秋や手をひろげたる栗のいが

寿讃

悼仙風

手向くる草八草や仙まうらかす

東海長光寺の石々て葬まれ

侍りきを葬りて

何ゆへかものゝあはれをしる芭蕉ぞあれ

武蔵野の月の若生へや松島の経

みちのくの浦にかゝる波と秋は来ぬ

よし野西行庵

祝俳はじめのことハむかしより昔清人

一草庵の席上饗庭をおしく

あらむつかしき味をもてまわす也

狐の絵

米の香をむかえて新手をみるべし

今の寺は味手も入やすくして

等栽をあはれみて

名月の見所とはん旅寝せむ

今年来るまじひて

世の中を稲荷にかへる舟の花

鮭ゝ新米を舟のまゝし舟

竹の露や舟の中ゆく風の秋と

嵐雪手おくり

さびしさを問てくれぬか桐一葉

名月や都も住しき盆ひとり

秋の暮縁家の亭主の中柱

此竹は井伊家の郎に得ちを君へ〆給

得たるのなし家にゆふれ給て別れの詞

を待うちの侘なりとて手中柱とし

其の人今に相斗侍家に傳りしとそ

発句并に歌

寛文画賛に和手中

月の鏡小春にみるや目正月

行雲や犬の欠尿むら時雨

戸田権太夫亭

一しくれ礫や降て小石川

ゆりて雨傘を手に提て門信

火吹竹はや志く枕て小豆食

むつかしくされ町の分家々下

ろの経てる志ほめて布みもれ

深川冬夜の感

櫓の声波をうちて腸氷る夜や涙

ゆかしさよみやきのふハさてふくとけ
突山の釜霜に鳴声寒し

茅舎買水
氷苦く偃鼠が咽をうるほせり
小野炭や手習ふ人の灰さうし
埋火してもきえて消てむ朽る

龍安寺にて
山寺よ呑てかも寝ん宵より山
白炭やかの浦島が老の箱

張良の説
世にふるもさらに宗祇のやどり哉
雲のれ千呼ハ辛き事の花柳

浪の花と雪もや水にかへり花
ゝきの雪松陰を園の契しるれ

耕月亭にて
雪をまつ上戸の顔やいなひかり
時雨をやもどかしがりて松の雪
ゆかしきましう性ち雪ハ小紋かな
玉霰と何といふとも翁の雪

まつおくれたる人の許にて
きほれまなや去八さの休戸の雪の竹
笠の緒や咽皆去ってより不二の雪
雪と見ハ南の枝やまさる

みちのく名所の内猶山

山は猫ねぶりていくや雪のひま
雪の日や簑笠の朝わすらゝき霜
猶芭蕉八年し呉天に雪を見るあまり
雪の朱箱根くしそなへしむ
ゆきの朝ひとり干鮭をかみえたり
名所八体の内
松島や雪か壱しやの名ゝくゝり
千代をふる天のてらん浅き海
こまれ芳葉飯手つまむ季の客
此そうけ続あくうきし季の淀ふらん
乾鮭や何の為し霰まて気に似人
あのみうなつまりおさく季の客

一体に当意ニそむねとしのいわ

貞享元禄年中
元禄辛未初冬九日素堂菊園に遊
重陽の宴を神無月のはじめにもうけ
侍りて八世須賀公紀異ゞ菊くみもやかれ
菊もいつく射沐重陽と言る心をまう
其ハ辰年陽のためしあそびしもはる哉
殘秋菊をと詠しさへしとくすあめる
れるゝるのにあるぬ
菊の香や庭にきれたる履の底

桐壷のめしたはおのつきうらみれハ志はしく
ともすおちをしばしに
此海そ里難波ん笠時雨
花の浮かうつて時雨ひかく
笠も茶を手をしぐるゝなの本
草枕犬もしぐるゝか夜の声
時雨ゆくや舟の帆綱手取付て
鍔に袂する時雨ゝ生尾かな
人の浮へさしめてゆかさく
さつ時雨前の家を乗時雨哉
犬やこふさへといふ行のおく
らいやとはうれたくとも袖を

あたしきておとま里はきやた火
旅人とよばれん宿の時雨
一尾根ほしぐるゝ雲か不二の雪
伊賀山中
初時雨猿も小みのをほしげなり
四里の道をすのう
志ぐるゝや田のあら株の黒む程
美濃雲井宿にて泊る
作り木の庭をいさめる時雨かな
島田驛塚本か家にて
宿かりて名をなのらする時雨かな
馬方はしらじ時雨の大井川

錦六亭主

りそくうり人も青ふ花さくみ道

新穀のむ飯くとくやきしされは

山媛ハ井出のかすのうしされれ

菊庵

人しを明角ら有れ宵くとも

支黒亭主

口切や堺の屋をあけのしき

鳩一手やたか君をゆく紫の雲

照国主

志のふさく枯て餅ふふやうれ

窓の清蒙とひて

花されは枯くしらくとこ流す学のるゐ

菊作や独り守れぬ菊の茎

枯くり病て菅その杜ゆとうけせる

骨墨や銘とうを尺にまう蝶のかう

大根引とふと銭

蕪藁干小坊主のるゐ大根引

消息

口上手古居しうつ古大根

玄角子旅館にて菜根を喫して

綿々丈夫に清談す

ものから大根一のしき囀うかれ

嵐のうら大根のか更に利し

笑も長途の雨にむかひ残なれ
とまりしの往かしに見へる傀儡
さるまじ人香へ附かれ手おもしろ
きのし狂言は才士は必にたよりし
ずとも不図思ひ出して作る
狂句 木のしげみ気竹空を何くされ
竹の画讃
本のしや竹にかゝる雪てき何事なし
名枝や幸れ一色に風の神ぞ
名うれの現にしも飲へることのわ
木ふしや彩豹いるゝ人の見
耕雪亭お壁すゝ

本梅に白ひやつけし夜く 範
三河新城の家士菅沼桜居か宅
にて侍て此木のしげやみな作ひ
鳳来寺にて第発心して
風に光るとめる 松 官 菊
角段の櫻現をとる
空人よ参名をちりきを蒼紫川
当主の可に持かれる神の蒼紫に
大通院主の宗派士芳翁を以っと
久しきおこにやみえたる事をおもふ
しに強て有をおもひて袖名に一
枚の霜さきしぬるふへもの一名よ

あきらめと夢とゆめて
世かゝちえゝや枯木の枝の長
大津をとゐる
三尺ハ山もゆかし新木のふすれ
有の浮きこしぬる吹照するに旅の心
をすゝしく
吾すゝる海や涼き家もみち
当寺は雪洞中也をしつまれてより
既に百年に移りふとのや御堂奉
加の縁に白竹樹ひて玉の石光ら
とおもひれ木之物なりて朱鱗に
覚侍りぬれハ

百年は寿しきを庭の落葉かな
老ひす縁酌　老子緣なしもかり
抓りつゝの間はされし老ひす縁
菊籬陰ま画りり御命講
消息
御宝講や海の中よれ涌玉外
竹芽峯
名庭や月もいつふる虫の冷
名寂又よみそそえむ出　桂
金屏の松は古ひや冬籠
鸚洒堂
游来の経をとむひなる周かし　一匹芦

冥の幅のくゝみをおくれよ生のこゝろも
ふるさとてふうれ
あるく津や田螺のなきしみる氣り

擽七十翁

旧里を去て忘はて田舎に家を持
といふ人あり家僕併て水木の稲干
家を告しめ心をかへしかたく千猿
奴阿殿か功をほしてあらぬ陶侃か故奴
をとゞふ謀や其ハ廿人をとゞめへすみかに
物ハ千万もちてあらぬ下位に在ても
上智の人ほりとなりて折角識解
なかむてとなされほかしや千の善を

しまりくゝのつね
先祝ひ梅をとゝて孫のみとりも守

千川亭に遊ひて

おしみ千伊吹をみてや名の氣

防川亭にて

真を探る梅千氣尺る折端作
熟田梅人亭にて塵の間を思ひたれど
まれや白き深みもらり
三河にて白雪とくるまの子二人へ拙
先拙後の名をゆるくゝて
香白ひ桃よりさゝらしまれ也
さし氣る花の友や名の葉哉

此里をほびといふ事は、むかし院の御
門のほめさせ給ふ地なるによりて保
美といふよし、里人のかたり侍るを、いつ
此文にかきとゞめるともしらず侍れ
ともいとかしこく覚え侍るまゝに
梅椿早咲ほめむ保美の里
おもしろき花入 杜国 梅椿之
寺島や野梅のこゝろ白の花
池下の茶店にて
枯葉を焚て手拭あぶる寒さ哉
吉田の驛にて
寒けれど二人旅ねぞたのもしき

[illegible]
三河の鳳来寺に詣る道の程、一夜かりに
此所は [illegible] 旅寝
夜着ひとつ祈出して旅寝かな
李下が妻の悼
被き伏す蒲団や寒き夜やすごき
元起和尚に酒を贈りけるとて
まつり
水寒く寝入かねたるかもめ哉
仙化が父の追善
袖の色よごれて寒し濃鼠
塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店

葱白く洗ひたてたるさむさかな

熱田にて

海くれて鴨の声ほのかに白し

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝきす

一ひよのなるとまかし川千鳥

秋さためん八 松風の里 呼續まて

梅開てこの 笠寺まて 夜の隣は

星崎の闇を見よとや啼千鳥

杜國を訪ひける道すから

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎

鷲子はしみそめくし鴨の足

杜國か不幸を伊良古崎に尋て鷹

の聲をおりふしきゝて

夢よりもうつゝの鷹そたのもしき

阿古川邊にて

すゝみゆくや高上りするかけ橋し

生ものゝひと川よ秋る海嵐の音

花（家枕にちやう）人の心をいて山家集

詩題千首の中

一家もとさしき菊の秋五月

若楓やすて梅の田舎の秋秋

瓶られる花の秋みる秋をまち

十二月九日初雪降の悦ひ

初雪やさいはひ庵にまかりある
曽良何某此あたり近くかりに
居をしめて朝な夕なに訪つ訪はる我
くひものいとなむ時は柴折くぶる
たすけとなり茶を煮る夜は来りて
軒をたゝく性隠閑をこのむ人にて
交金をたつある夜雪を訪れて
訪侍て
君火をたけよき物見せむ雪丸け
初霜や菊冷初る腰の綿
抱月亭にて
市人にいで是うらむ雪の笠

おもしろし雪にやならむ冬の雨
杜国亭にて中将き人のもとにて
取繕くろひて
雪と雪こよひ師走の名月か
箱根こす人もあるらし今朝の雪
ためつけて雪見にまかる紙衣哉
旅人を見る
ころとく詠る雪のゆふしぐれ
深川八貧の中
米買ひに雪の袋や投頭巾
寒山自画賛
庭掃て雪をわするゝ箒かな

閑居箴

酒のめハいとゝねられぬ夜の雪

　鳴海寂照亭にて

京まてハまた半空や雪の雲

　熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

　去年の伊良古を廻ひて越人今歳

二人見し雪ハ今年も降りけるか

　信濃路旅

雪ちるや穂屋の芒の刈残し

いさゝらハ雪見にころふ所まて

　山中子等と遊ひて

雪の中に兎の皮の髭つくれ

　元禄元冬奈良大仏再興

初雪やいつ大仏の柱立

初雪や聖小僧の笈の色

松の音の法人とかや聞ける

隠れ住の後志賀の里に住給ひし

かけて大津松本のあたり納めしと云

老尾の許に訪ひ行けるに住しと語る

出ける法師にて執しける折ふしハ

か降人尼　おもかけやしかの雪

　湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

大雪や淡くひとく佐藤の家

三秋を経て深川の艸庵に泊りけれハ旧友門人日ことにむつれ来て酒のませ句ハさらへ侍る

ともかくもならてや雪の枯尾花

日比にくむ鴉も雪のあしたかな

小町の画讃

たふとさや雪降ぬ日もみのと笠

草庵千士洞

木枕のあかふしぬるや夜るの雪

深川大橋半ばかゝりし時

初雪やかけかゝりたる橋の上

初雪や水仙の葉のたはむまで

竹の画讃

あさみどり雪中の竹の事しきり此ものゝ先しかくの浪の雲

ゐれ月のはしめ武江に入る

打ちも旅寝のよくの手すかれ

深川大橋成就せし時

ありがたやいたゝいてふむ橋の霜

稲すゝめや竹刈るさくさのしも

かくしと扨かし淡し竹の露

去年四友子を送りて醒余子かのる

霰を請て曙路ひくやうに送りけり

穐田は霜夜の花見るはしきの丸
かりそむ案山子の袖や取手の霜
残る手も霜や一杢のと投て見し
杜若ら虎を扇ニ句
きれハつて　蕭しまよし水霜の宿
麦生てよき垣ねやたけまゝ
菊の葉は切もて火さくらむさむ霜
火燵はしくて樹木起信子へ宗の句
いひつのはすもく
くすのむさしつゝと霜の枕かな
古き紙をとゐのゐて
霜めくらまそしと吹る火桶かな

かくの梅の去よりおこる火桶かな
少年をとこしまくる人千餘す
埋火もきえや流の承てまみと
きりくはつまれ寺は暁十火燵かな
住つの炭のこゝろや置火燵
桜の梁奈良の清浄こゝろ何かな
出羽安旅館
埋火や聖そしまそ宗のこゝは清し
五つむ川薪の手すぎふいろかな
貝錦翁の讃
稚児やしらぬ翁は丸頭巾
十二月九日一井亭にて

秋もよし　宗匠涼気の夕月秋
月志らき涼気ハ手洗ふ涼しさ
河豚汁や鯛もいまのまゝ貴人の
はつかなる古き奴僕ありてかさく酌
のぞし〳〵をもる
兄弟のくまし〳〵むやうふくとけ
桑ばたけ幽ひろき熟田ある
かくひ来ぬ饂飩うりて七里まて
為さわくる袖の池画や宮の御
いさみ修もして戸ろう京むをまき

自画自讃

吟の花しきまゐやあつまれの桧木笠

石山はおもたゞしき霧ふる月
積翠の蓮花を人しきゆかしき
あし繰きよ河しるの水面をみてをんへ

与謝人文

冬しるぬ太刀や輪よく春あして

如行尊まて

琵琶行の夜や三絃はおもし涼しき
雑飲手琵琶きく拜の露の月
はなみこ簾ひろむ流れゆく後は
前林庵手陣和を書らて
老僧の境も気へまくのまちなりき
納豆きる音志はしやまて行ゆくむ

からさけも空也の痩も寒の中
月花の愚に針立ん寒の入
かく佗たり芭蕉の翁のかいつくり
事とられぬ世こそ学難そ[illegible]
自悟識
たまたま人は数にも入らむ也の雪

画讃

ゆく年や渺ゝ歌は山[illegible]
うかうかと年よる人や古暦
年くれて三人よろしく雪晴られ
煤掃や某ゆく方の家ひき
年の市線香かひに出はやな

月やそこのさそひし年のうち
旅寝してみしや浮世の煤はらひ
旅行
煤掃は杉の木の間の嵐かな
すゝはきは己か棚つる大工かな
宗鑑の詞
古伏しや僞の酔は泊年の暮
ぬす人にあふた夜もあり年の暮
何に此師走の市にゆくからす
五百丸元旅の行として
春や立年やとくむ小晦日は芭
芭蕉の本れは風情もはせを

此御の五世一生浪花に跡しるする
を手鏡て諸道の錺りをそし
是や世に賞す備へぬ吉盒子
浪の御霊前玄虫處桃丸無り
挙られて静かに友ふやとしうきれ
すき煙火のきし中より臨月來京都を
立出て乙州の新宅より去るとゆうて
人手家をしかくもこに季を香こ半從
道るゆく沙汰ハしれる年のうちれ
此く手やくもりこと咲く梅の花
去りの焼さる年わすれるきけんれ
塔乃いけるかぬ此ま季のくれ

萩堂亭季意

芭蕉はも蓮の咲ふ出ますふ
ふ方汁庵たきろり季の盛
まかも三十ら年らのし餅の為
海路ふ番て米のさ栗と給ひて
近江の浦の年とし物や紫一把
られして餅を餅けるひのれ
みやおゑ二尺の七五三を季の盛

甲季ゑ故
かちなりし六橋家坂を蔵す氣

釣よきを詠 松島を行て詠

酒のみ居たる人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉

貞徳宗鑑守武之画像

三翁は風雅の天工をうけえて心匠を
萬歳に傳ふ此かげにあそへるもの道の流
えをあふがざらめや

月花の是やまことのあるじ達

題苑生

此槌のむかし椿か梅の木か

四山の瓢

物ひとつ瓢はかろき我世かな

布袋画讃

ものほしやふくろのうちの月と花

老後

越の新潟にて

海に降雨や恋しきうき身宿

家はみな杖にしら髪の墓参

涼さや是よ湖水の火縁の家

画讃

うほしく季を経て見る桔梗紅

はじめは芝麻とこそみえさと一草にし

和歌画讃とかけれハ新町の有文字屋
餅花やかざしにさせるよめが君
大津の秋ぬすみすみぬ
梅干のよふに黄な(?)かる縄かな
辛崎夜雨
琵琶の湖よ蹴なる松の律
粟津晴嵐
さそひ来る人の浪ふく市の声
矢橋帰帆
夕のぞみ赤石の浦を帆の釣して
比良暮雪
さそく雲白衣の下へ比良の雪

石山秋月
汐やのぬけ子よ此湖の秋の月
瀬田夕照
雲かかるかさのぬ網の夜の袖
堅田落雁
雲の文かくくる堅田に片便宜
三井晩鐘
雲斤すれハ霞し花の鐘
右八景八宗房の時の吟なりと云
丸のくるまきも秋市中に住て吟ける處を
涼川の添りに続き長安八古来名利の

此宗子ふりしく宝ふくもの八行跡にてこそ
いひけん人のかしこく覚侍るは此翁のともしき
あはれや
宗の戸に紙衾をもてかこひく嵐々の音
清見
三十里尾張大根のもちしいのれ
画賛
たのむぞよ霜風なゝ松の残念
けし炭に薪わる音の小鍋の奥
蕪をうつて
深川や根こしの芭蕉のこゝろ
頭巾よそに見まもしこもや跪きけれ

ふたゝひ芭蕉庵を造りいとなみて
何の縁芋や此翁八百との
古　梅